

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）

和田忠彦



学位申請者 花本 知子

論文名 「夢幻的な論理——アントニオ・タブッキの物語宇宙」

結論

花本知子氏から提出された博士学位請求論文「夢幻的な論理——アントニオ・タブッキの物語宇宙」について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は全員一致して博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は、和田忠彦を主査に、副査として、前年度まで申請者の副指導教員として、とくにテキスト分析の理論と実践訓練に力を注いでくださった水林章上智大学外国語学部教授、イタリア美術史・美学の研究執筆活動を精力的に展開する岡田温司京都大学大学院人間・環境学研究科教授のおふたりを学外からお迎えし、学内からは西永良成、松浦寿夫の両氏を加えた5名で構成された。

論文の概要

本論文の主眼は、イタリア人作家アントニオ・タブッキ Antonio Tabucchi (1943-)が35年間に生み出したテキストのそれぞれが、いわばどのような《自律と照応》の関係を結びうるのか、そしてそれらのテキストが全体として一個の「作品」（と論者はよぶ）を形成するとすれば、それはどのような構造を有した有機的組織体でありうるのかについて、解明することにある。その方法として、①自伝的要素（作家とその家族）、②同時代の現実（大量虐殺と《鉛の時代》）、③反復・変奏される主題（《子ども》/宇宙の無限）と表現形式（批評から短篇へ）の三点に着目し、相互の浸透や連関の様態を適宜、主題論・物語論・テキスト生成論に依拠しながら具体的に分析している。

以下、論文の構成に沿って概要を述べる。第1章では、作家の自伝的要素がどのように虚構作品に織り込まれているかが分析される。小説第三作にあたる短篇集『逆さまゲーム』（1981）収載の表題作を、先行する中長編二作『イタリア広場』（1975）、『ちいさな船』（1978）にはみられなかった作家と共通の属性が主人公に多数投入された最初の例として抽出し、転換期をしめす作品と位置づけたうえで、以降、そうした作家の自伝的要素が、具体的にどのように投

影され虚構化されていくのかを跡づけている。20世紀ポルトガル文学研究者でもある作家の文献学者としての側面や20歳代のパリでの留学体験、さらにはポルトガル人の妻をもつイタリア人小説家の日常が、『インド夜想曲』(1984)から『レクイエム』(1991)を経て『いつも手遅れますます手遅れ』(2001)にいたるまで、作品の虚構性を保証する機能を果たしていることが明かされる。次いで、最新長編小説『トリスターノは死ぬ』(2004)において尖鋭化する《父》の主題が、じつは先行する短篇や長編において既に繰り返されてきた肉親をめぐる主題の集約的到達点であり必然であることが確認される。

第2章では、第二次世界大戦における虐殺の経験(ホロコースト、ヒロシマ)と、戦後イタリアにおけるテロルの季節(《鉛の時代》)について、作家がどのように物語っているかが分析される。まず前者については、前掲の作品『トリスターノは死ぬ』に焦点を当て、物語における語りと構造の混乱が、じつは「ヒロシマ以後」のとめどない不安と不透明感を鏡像的に反映した意図された《混乱》であることが検証される。次いで後者について、1970年代に多発したテロ事件が輻輳する時間のなかでイメージを変幻させつつ重層的な物語構造をあたえられることによって、歴史の暗部から掬いだされ、虚構においてリアリティを獲得する様子が、短篇と、そこに投入された歴史資料の解析をとおして浮かび上がる。

第3章では、作家が同一の主題を複数の作品においてどのように変奏しているか(たとえば《子ども》を主人公とする四篇がいずれも《記憶/忘却》を主題に据えるかにみせて、その実、《物語の再生》をめぐるメタレベルの主題の絶えざる変奏であること)、また批評的言説がどのようにして短篇小説へと変貌をとげるかが確認される。そして、いつか書かれるはずの小説の一部として、その完成に先立って発表された断片である三つのテキストが、最終的にどのように「ホームグラウンド」(長編小説『トリスターノは死ぬ』)へもどってきたのか、また、小説のどの地点に着地したのかが検討され、ひとつの作品が生成するまでの《書き直し》のありようが精緻に分析される。

以上、三つの複眼的視点に立って展開された検証をとおして、論者は、「おわりに」において次のように結んでいる——アントニオ・タブッキの作品はしばしば時間や場所の連続性を欠いた場面や状況の散乱する「非論理的」な断片の集合に映るかもしれないが、「どれだけ突拍子がなくとも、夢には夢の論理があり、眩惑には眩惑の論理がある」。これを論者は、タブッキの作品世界を支える「夢幻的な論理」とよび、ルイス・キャロルの《非・論理》に重ね合わせる可能性を示唆して、論を終えている。

審査の概要及び評価

高い評価を与えられる点は以下の三点である。①日本において最初のタブッキに関するモノグラフィーである点(そもそも、イタリア20世紀文学を対象にした学位論文の事例は、まだ極めて少数(1980年代末に2件、Pirandello

と Malerba) にとどまり、国外においても、雑誌論文を除けば、実質、Flavia Brizio Skov による *Antonio Tabucchi – navigazioni in un arcipelago narrativo* (2002)が公刊されたモノグラフィーとして挙げられるのみ)。②文体分析、異稿比較といった分析に際してしめされる細やかな身ぶりが、論者の研究経験を考慮に入れると、およそ経験値をはるかに超えた精確さを裏付けに持つ説得的かつ鋭利な読解を実証し、《現実/虚構》の関係をテキスト生成の現場に立ち会うこと(追体験)を介して構造的に解明することに成功している点。③巻末に添えられた書誌が、タブッキ本人の著作もふくめ、文字どおり網羅的とよべる現存するもっとも充実したデータである点。

各審査委員より疑問もしくは批判として指摘のあった改善の余地のある点は以下の諸点に集約できる。①《読み》の実践が、もっぱら「自伝」ということばに端的にあらわされているように《書き手》とも《作者》とも特定し得ないアントニオ・タブッキという実在する個人の発する情報に依拠しつつ行われることによって、テキストの論理が自律性をあやうくするときがある。②記述の戦略的選択として、引用を批評行為の実践ととらえる姿勢から生じるコラージュの手法は、一定の分量を超えてその緊張を維持することがきわめて困難である。それゆえ、(たとえそれ自体が明らかにみごとになまでに音楽的かつ詩的構成を有していたとしても)全体の構成から欠落した主題(分けても、視覚芸術をはじめとするメタテキストとの関係)のいくつかが見えるという不満が生じる。③テキストに内在する論理を特定するためには、参照項となる判断材料がときに潤沢とはいえず、批評理論的布置の稀薄さを感じる点がある。

だが以上の三点は、この論文がまさにテキストとして読み手を十二分に刺激するものであり、その先駆性に触発された今後の課題にむけた提言であり、成し遂げられた成果の学術性を否定するものというより、論者の力量を高く評価するからこそ生じた批判であることは言うまでもない。また、こうした疑問や批判点にたいする口述試問での応答は、指摘のあった諸点をあらかじめ自覚していたと判断されるきわめて適切なものであった。よって審査委員会は全員一致して冒頭に述べた結論に達した次第である。